

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00896

研究課題名（和文）グローバル人材育成を目指した大学留学プログラム構築：韓国長期留学の質的観察から

研究課題名（英文）Establishing the Study Abroad Program to Develop Global Minded Persons:
Qualitative Observations of Long-term Study Abroad Program to Korea

研究代表者

服部 圭子 (Hattori, Keiko)

近畿大学・近畿大学 生物理工学部・教授

研究者番号：30446009

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は1年間の韓国への長期留学における学生らの異文化間のトラブル・誤解・摩擦の発生と解消の過程、自己の気づきの変容を質的に観察・分析し、グローバル人材の普遍的要素の解明や、大学留学プログラム構築への貢献を目的とした。留学前後のアンケート、留学中のレポート、留学後のインタビューをデータとした。出発前後のアンケートではEQ(Emotional Intelligence Quotient)の変化に注目し、4つの要因（他者との共生、社会への積極的な対応、他者への共感、失敗への不安）を得た。それらを基に、事前・事後研修に有効なカード教材を開発した。韓国以外の留学を対象とした教材への発展が課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「グローバル人材」育成を目指した留学プログラムの検証・発展させることを念頭に行った研究である。英語圏への短期留学を対象とした研究が多い中、韓国に長期留学した学生の学びを分析し、留学プログラムの再構築に向けて提案をすることにも意義があると考えられる。留学中のレポートや帰国後のインタビューをもとに、留学中の異文化体験を通じた学びや気づきの変容、トラブルや摩擦の解消などについて質的・量的の両側面から分析した。それらのデータをもとに、実際の留学事前研修で利用可能な教材を作成し提案したことは、今後のプログラム検討に貢献するものであるとともに、韓国以外の留学全般にも利用可能な教材案を提示したことは意義ある。

研究成果の概要（英文）：This study qualitatively observes and analyzes the process of occurrence and resolution of cross-cultural troubles, misunderstandings, frictions between students, and changes in self-consciousness during a one-year long-term study abroad period in Korea. The purpose is to contribute to the construction of study abroad programs at universities. The data consists of questionnaires before and after study abroad, reports during study abroad, and interviews after study abroad. A survey conducted before and after departure focused on changes in EQ (Emotional Intelligence Quotient) and clarified four factors (coexistence with others, positive response to society, empathy for others, and fear of failure). Based on these, a card teaching material was developed for effective pre-training. The teaching materials for study abroad in general can be developed in the future.

研究分野：言語文化学・社会言語学・言語教育・外国語教育

キーワード：グローバル人材育成 大学留学プログラム 長期韓国留学 事前・事後研修 質的研究 異文化コミュニケーション能力 教材開発 留学の学びと継続性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

グローバル化や日本社会の多文化・多言語化が進む中、世界的視野を持って活躍することができる人材育成教育に関して大学が担う役割は大きい。近年、様々な目的で世界各地に留学する大学生が存在するが、英語圏への短期留学を対象とした研究が多い中、非英語圏に長期留学する学生を対象とした質的研究はまだ少ない。そこで、非英語圏(韓国)に長期留学した学生の体験を質的に分析し、大学留学プログラムの再構築に向けて提案をすることに意義があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、韓国への長期留学生¹⁾の留学中のレポートや帰国前後のアンケートおよびインタビューデータをもとに、留学中の異文化間のトラブル・誤解・摩擦の発生と解消の過程、自己の気付きの変容を観察・分析し、留学の意義や学生の学びなどを解明するための基礎研究である。そのことにより、グローバルに活躍できる人材の普遍的要素の解明、複言語・複文化主義を取り入れた異文化コミュニケーション育成や大学グローバル人材育成プログラムの構築、留学前後の教育プログラムに貢献することを目指す。

3. 研究の方法

単位修得を目的とした1年間の韓国への留学生を対象として学生の学びの過程を観察するにあたり、近畿大学国際学部東アジア専攻韓国語コースの学生を対象とした。近畿大学国際学部は「グローバル社会で活躍できる人材の輩出という目的の実現を目指す(国際学部 HP)」という教育方針のもと、1年次前期に学生の専修言語(英語、中国語、韓国語)及び「異文化理解」等の授業を行い、学生らを1年次後期より約1年間の留学に送り出している。国際学部の構成は表1. に示したとおりで、本研究の対象は太字で示した学生(4年分)である。

学科	専攻	コース	専修言語	定員
国際学科	グローバル専攻		英語	450名
	東アジア専攻	中国語コース	中国語	50名
		韓国語コース	韓国語	

表1. 近畿大学国際学部の構成

本研究ではまず、留学中の学びの記録として年4~6回のレポート(年度によって回数が異なる)や、留学前後のアンケート調査、帰国後のインタビューデータを資料として定性的調査を行った。具体的には、留学中に学生が提出した留学レポートを、質的分析支援ソフト NVivo11 Pro を用いた M-GTA(木下、1999)によるコーディングを行い、留学中の異文化体験からの気付きや学び、トラブルや摩擦への対応について観察・分析した。

研究を進めるにつれ、分析は量的研究と質的研究の mixed method(混交研究法)手法を用いることとした。留学前後のアンケートでは、心の知能指数といわれる感情知性 EQ(Emotional Intelligence Quotient)の変化を観察し、意識の変化や行動変容を量的・質的に分析した。留学を希望しない学生との変化も比較し、留学後の心の成長、学業以外の心的な成長に及ぼす効果や影響を見出すため、因子分析の手法で分析を行った。

また、留学プログラムの検討、事前事後学習の改善や指導のため、学生の留学先の韓国の教員やプログラム担当者への聞き取り調査も行った。

分析データをもとに、留学事前研修のための教材開発を行った。2017年~2020年の留学生の

データの中から 2 期生(2017 前期 出発 / 2018 後期帰国)と 3 期生(2018 前期 出発 / 2018 後期帰国)のものを扱い、2 期生の 12 名と、3 期生の 17 名の合計 29 名からの発話や記述内容に焦点を当てて作成した。そして、韓国留学経験者の協力を得て試験的に利用し、修正を加えた。

4. 研究成果

4.1. 留学中の学生の気づき・学び

学生の学びの過程を観察したところ、政治的関心を喚起したり、文化的多様性を受容するようになったり、英語能力の重要性に気づいたりしていること、さらに、留学を通して、共通言語としての英語への意識・韓国語以外の言語に対する関心や多言語意識が芽生えてきていた。初期の留学レポートを非言語的ノンアカデミック・アチーブメントに焦点をあてて分析したところ、「コミュニケーションツールとしての英語の重要性の再認識」「韓国語+英語という複言語話者の視点」「日本人性の再認識」「帰国後の学習に対する期待と不安」の要素が抽出された。留学に行ったという満足感だけではなく、留学先での学習成果がいかに将来の進路やキャリア形成に繋がるかという視点からのカリキュラム構築が課題として挙げられた。

4.2. 留学を通じた学びの継続性

4.1 をもとに、研究代表者・研究分担者は各々、留学後の再留学、多様な側面での学びの継続性、帰国後の活動への発展などの側面から分析・考察を行った。また、海外留学前後に変化した要素、変化しなかった要素の各々の原因を解析し、海外留学による学生の意識・行動の変化の傾向を明らかにするべく、比較対象群として留学をしなかった学生も対象とし、EQ(Emotional Intelligence Quotient)を用いた量的分析を実施した。その結果、「留学を通して何をどのように学んだのか」という点においては、共通の課題として、1)継続的な学習環境の提供に関する課題、2)課題解決能力育成の課題、3)学部・センター、大学レベルでの指標作成・プログラム構築の課題、が挙げられた。そこで、以後の研究では、特に2)の課題解決能力の育成に焦点を当てて取り組むこととした。

4.3. 因子分析：不安の解消の課題

質的研究による探索を補助するための量的研究として、質問紙の項目の妥当性を客観的な指標で評価すること、因子分析を用いて質問紙に潜在し、回答に影響を与える可能性のある因子を特定することを目的とした調査を行った。4.2 で用いた調査方法を発展させたものである。留学後の心の成長、学業以外の心的な成長に及ぼす効果や影響を見出すため、因子分析の手法で分析を行った EQ を用いた量的分析から、4 つの要因(1 . 他者との共生、2 . 社会への積極的な対応、3 . 他者への共感、4 . 失敗への不安)を見出した。その結果をもとに、不安の解消に焦点を当てた新たな科学研究に発展することになった

4.4. 事前研修で用いる教材の開発

留学生らは韓国滞在中に様々な課題や困難に遭遇したり不安な気持ちを抱いたりすることが多く、自身で解決策を見つけたり、周りの力を借りて乗り越えたりしている。報告者らは、留学先での不安を取り除くべく事前に予測できる事象について学んだり考えたりすること、自身で問題解決ができるための準備をしておくことが大切であると考えた。そのために、既に留学した先輩たちの経験から得たデータをもとに、事前研修のためのゲーム的要素がある教材を開発することとした。

カード教材の開発

4.3 で述べた 4 つの要因(1 . 他者との共生、2 . 社会への積極的な対応、3 . 他者への共感、4 . 失敗への不安)の視点から、テキストデータのエピソードに印をつける作業を行いデータ整理を試みたが、4 要因での提示は具体的な内容が重複することもあり、また学生にわかりにくいと判

断した。そこで、場面(寮・学校・生活・街)を設定して分類することにした。アンケートやレポートで述べられたコメントの中から、留学中に特に不安に感じたこと、遭遇した困難などと、留学先での課題解決になる内容についてデータを整理・抽出し、45問の質問(状況設定)を作成し、カード教材を作成した。これらの質問の答えや解決方法を話し合ったり調べたりする方法で、留学事前研修に利用することを提案した。

カード教材例

カードには、以下の例のように、通し番号と4場面を記した。

裏面：設問



報告冊子：韓国留学事前研修教材「韓国留学あれこれ：-韓国留学の前に-」の発行

開発カード教材一覧に加え、4つの場面での学生自身(留学経験者)の解決方法と教員からのコメントを追記してデータを整理し報告書にまとめた。留学生の学びの研究から教材開発に至る経緯や成果の説明に加え「45の質問リスト一覧・留学経験者の声、担当教員のコメント・韓国留学に向けた心がまえ・事前研修用ワークシート・事前研修感想シート」などの項目を掲載した。そして、今後の発展的な教材として、すこく教材開発についても提案した。

カードを用いたワークショップ実践

カード教材作成の過程で、韓国留学経験者に実際にカードを使用してもらい、意見やアドバイスを得る機会を設けた。学生からのフィードバックの中で、教材の良い点としては、「質問内容に共感した」「カードに記載された質問について事前に考える機会を持つことで広範囲の学びができる」「ゲーム性があり楽しく参加できる」などが挙げられた。一方、具体的な対処法については事前研修内で担当教員が紹介する予定ではあるが、「具体的な問題への対処法を教える内容を入れる」「紙媒体を電子ツールにしたり、パソコンやタブレットなどで入力できるものにする」などの改善点に関するコメントも得た。「学生同士で話し合うと似た意見が出やすいので、先輩が司会の役割を担って進行するなどの方法も検討する」とのアドバイスもあった。

具体的な教材に対する感想や改善へのアドバイスには、「留学前の不安な気持ちを思い出せた」「留学に対する不安を消せるようないい機会、教材だと思った」「私自身も韓国に行く前にこのようなことを知れていたらよかったなと思う質問内容があったし、このようなグループワークができた意味あるものになったと思う」「韓国留学前はまだ実感が無いかもしれない学生でも、ゲーム性があるため気軽に楽しみながら留学について学んだり、対策を考えたり出

来るいいシステムだと思った。細かい内容についてもカードに記されていたので、今まで留学セミナーで行ってきた特定の範囲を突きつめる調べ学習よりも、はるかに広い範囲について学べるように感じた。そのほうが留学に行った際に様々な状況に対応できるようになるので、とても良いと思う。」などがあった。

教材改善への具体的なアドバイスとしては、「質問が似ていたり、努力次第で解決することが答えになる問いが多かった」こと、「寮生活の話とかは想像がつかないと思うから、対処法を考えても分からないこともある。そういう質問は教えてあげる、先輩たちからの教えなどの項目を作るのもいいかと思った」や「クレジットカードを失くした時の対処法とかのハプニングもあるから対処法を教えられたらいいと思った」などが挙げられた。「体調を崩した際時の連絡手段」「病気に関する知識」「寮に関する質問(外泊のルール・部屋に関する不備などへの対処)」を付加することなども提案された。

その他、「韓国の食文化、韓国人と接する上でのマナー、タブー」の予備知識、「ネイバーマップという地図アプリ」の活用、「頼れる、相談出来る友達を1人は作っておくこと」や「何を目標とするのか留学前に考えて準備すること」の大切さや、「韓国での銀行口座の作り方やSIMカードの契約の仕方、ビザの仕組み」「交通面での危険性」の事前学習の必要性が提案された。

5. 今後の課題

グローバルに活躍できる人材育成や、大学における留学プログラムの発展に貢献することを目指し、単位取得を目的として韓国に長期留学した学生の学びや自己変容、滞在先での課題を分析した。それらの分析をもとに、楽しく互いにコミュニケーションを取りながら留学への不安を軽減し準備することを念頭に、留学事前研修で利用するためのカード教材を開発した。留学経験者を対象に行ったワークショップにおいて、教材自体への好評価は得たが、改善点の指摘もあったため多少の修正はした。しかしながら、残された課題としては、カードの設問内容の再検討や利用方法のバリエーションの模索に加え、電子入力やオンライン対応、SNSを活用している世代に適した教材の提案方法の検討が挙げられる。今後、実際の留学事前研修で使用するを通して、改善していきたい。

また、カード教材に加えすごろく教材についても模索中である。すごろく教材も韓国留学を対象として提案したが、今後、留学先を限定せずに留学一般を対象とした教材や、グローバルに活躍するために必要な要素について学び気づくための教材にも発展させることが可能であろう。近年のコロナ禍により、海外留学の在り方も多様になってきている。それらにも対応可能な教材の在り方を検討することも今後の課題である。

<引用文献・主な発表・論文など>

木下康仁(1999) グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生 弘文堂.

i トビタテ JAPAN!の定義に従い、1年間の留学を「長期留学」とする。

<http://www.tobitate.mext.go.jp/about/flow/index.html>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高橋 朋子、服部 圭子、武知 薫子、酒匂 康裕	4. 巻 48
2. 論文標題 長期交換留学における大学生の学び 韓国の大学単位取得型のカリキュラム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 86~100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34347/iesj.48.0_86	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 武知 薫子・酒匂 康裕・服部 圭子	4. 巻 11
2. 論文標題 EQ指標を用いた留学の効果検証方法の提案 質的研究の探索補助としての量的研究の提案	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター紀要・外国語編	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kurie Otachi, Keiko Hattori	4. 巻 -
2. 論文標題 People Involved in Language Learning Support in Community-based Japanese Language Classes	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Language Support for Immigrants in Japan: Perspectives from Multicultural Community Building	6. 最初と最後の頁 53-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 服部圭子・酒匂康裕・武知薫子
2. 発表標題 留学事前研修のための教材－韓国長期留学生への調査から
3. 学会等名 グローバル人材教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 箕浦有紗・角崎雅武・森兼志保・浅見泰雅・山口明乃・服部圭子
2. 発表標題 留学における主体的な事前研修に向けた教材作成
3. 学会等名 グローバル人材育成教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hattori, K., Takechi, K., & Sakawa, Y.
2. 発表標題 Tips for better internationalization of Japanese young people, based on a mixed methods research
3. 学会等名 AILA2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 武知薫子、酒勾康裕、服部圭子
2. 発表標題 EQを尺度に用いた海外研修プログラムの効果検証
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 武知薫子・酒勾康裕・服部圭子
2. 発表標題 EQの変化に見る 海外研修での学びの考察
3. 学会等名 グローバル人材育成教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 服部圭子・高橋朋子・武知薫子・酒勾康裕
2. 発表標題 留学における学びとその継続性：韓国長期留学経験者を対象に
3. 学会等名 日本国際理解教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 服部圭子・武知薫子・酒勾康裕
2. 発表標題 韓国への長期留学を通じた大学生の学び - 留学前後の調査から
3. 学会等名 グローバル人材育成教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 酒勾康裕・服部圭子・武知薫子・高橋朋子
2. 発表標題 語学留学経験者が持つ韓国再留学の意義 - 韓国語専攻学生を対象としたPAC分析結果を中心に -
3. 学会等名 国際韓国語教育学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>服部圭子編(2019)グローバル人材育成を目指す留学プログラムの構築にむけて-近畿大学生の学び- 平成30年度 学内研究助成金・21世紀教育開発奨励金報告書 pp.1-115</p> <p>服部圭子(2023) 韓国留学事前研修教材 韓国留学あれこれ - 韓国留学の前に - (有)アーキインクス pp.1-18</p> <p>科学研究費助成事業(課題番号18K00896)研究チーム(2023)韓国留学あれこれ(カード教材)</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	酒匂 康裕 (Sakawa Yasuhiro) (00510497)	近畿大学・国際学部・准教授 (34419)	
研究分担者	高橋 朋子 (Takahashi Tomoko) (30635165)	近畿大学・語学教育センター・准教授 (34419)	2018 年のみ
研究分担者	武知 薫子 (Kaoruko Takechi) (90724865)	近畿大学・短期大学部・講師 (34419)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関